

白岩弁財天社

祭神

宇賀神
鳥居 春日鳥居

由緒

白岩弁財天の建立の時代は定かではありませんが、伝記によれば、徳川三代将軍家光の時、此の地海嘯起り現在の那古観音下一帯は海水と化し、早朝一匹の白蛇が火の玉を喰へて塩焚川をさかのぼり、大芝芝崎を区分する小川を経て当時池であった弁天裏の洞穴に姿を没したと伝えられ、人之神の使としてあがめ、ここに社を建て安芸の宮島より厳島神社の分身を受け、白岩弁財天と称し藤の木東の守護神としました。毎年十月十六日を祭日と定め、毎戸に甘酒を造り、これを供える習わしで、武運長久・家内安全・万病平癒の祈願をします。(現在の子供・大人御輿を担いでいます)

弁天池の水質は諸病に特效ありと云われ、之を用いる者が跡を絶たず、更に洞窟に見る鍾乳石は、昭和三十一年東京大学教授穂積博士の鑑定に依り、小規模ながら関東周辺においては希に見るものとして天然記念物の申請の価値あるとされるに至りました。

地域の自慢

那古地 人も少なくありません。区の中で 東藤青年団の結成は、明治二十八年(一八九五年)までさかを入れており、東藤パージョンの教のぼりです。「二人の力え方が定着し、子ども達のバチさばは例え微力きの上達には、目を見張るものがあり、協力一致団結するならば強大と特徴で、それを楽しみに、見学に来る



那古観音まつり

例祭

はもとも例祭日と七月十七日(宵祭)と十八日(本祭)。十八日に祭典。祭典後に連合曳き廻しを行うという決まりになっています。現在は七月十八日以降の土・日に祭礼を開催しますが、正確な日程は毎年、総代会議で決定されます。東藤組に残る「當組花



「國豊」が刻まれた山車扁額と後藤義徳の彫刻

り、更に儉約を重んじて、それぞれの道に励めば、やがて国は豊かになるであろう。」これは、結成当時の想いを表す精神的支柱として今も大切にされている精神です。山車扁額には「豊国」が刻まれ、囃子台の内にも「協力一致」が彫られ、伝統の精神が今日まで引き継がれているのです。



那古観音まつり出祭の6台の山車・屋台

したが、次に、大芝組、浜組、寺赤組、宿組と順次造られ、現在のように盛大な祭礼が営まれるようになりました。」と書かれています。

各町独自で行っていたものを東藤、大芝、芝崎、浜の四町合同の祭りとして明治三十年(一八九七)より那古観音の縁日に合わせ、一年交代の年番町が祭礼の運営を行うなど、那古祭礼規約を定めて発足しました。そ

車及青年団沿革大要」には、「明治の新政になって、すべての人々が平等になり、當組に花車というものが造られあました。そして、これを引いて鶴ヶ谷八幡神社に参拝したのが最初です。この花車には太鼓をのせ、その上に鶴の作り物が立っているもので、最初は當組と芝崎組のみでありま

東藤組山車

棟 梁：東藤 加藤佐一郎
人 形：太閤秀吉と馬印の千成瓢箪
扁 額：豊国(青年団結成の精神)
上 幕：しめ縄
大 幕：加藤清正の虎退治
(平成14年に新調、川島織物製作)
泥 幕：藤の花葉に不如帰
(平成12年に新調、館山嶋屋)

彫 刻：太閤秀吉の出世物語、他
彫刻師：初代・後藤義徳(1909~1995)
人形師：東京 浪花屋七郎兵衛
刺繍師：東京 内田宗一
制作年：山車・人形・幕は、昭和11年
提 灯：藤の花葉に東
半 天：背に下り藤と瓢箪にあずま。襟にひがしふじ。



平成22年5月、新築なった山車小屋と東藤山車



この祭礼の大きな見どころは、大太鼓の技を競い合うお囃子であり、六町内の山車・屋台の連合曳き廻しや、本祭の夜に那古寺境内でとりおこなわれる年番渡しの「締めことば」も有名です。